

戦争に明け暮れた20世紀の世紀末を終わり、今世紀を迎えたときの複雑な気持ちを思い出すこの頃の世相である。今ほど人の命が軽視され、弄れる時代は無かったのではなからうか。国内では、少年たちは弱そうな人をなぶり殺しにして鬱憤を晴らし、何の罪の意識も持たない。中近東では、戦争やテロがゲームのように繰り返されている。

こんな時にこそ、江花さんの画に心の底からの慰めを見出したいものである。

「画家になる為に生まれてきた人」という言葉があるが、江花さんは正にそういう人である。画を描くことしか考えない。純真無垢な少女のような人柄である。

江花さんの世界は、詩の国である。作品の中の人も物も、心暖まる抒情に浸っている。江花さんの世界は、音楽の国でもある。楽器や楽師が度々描かれているからではなく、画中のすべてが快いメロディとリズムを奏でているのだ。

そして江花さんの世界は、年を経て、段々と宗教の国にも近付いている。聖母子やヤコブ等、聖書を題材にした作品が増えているからではなく、画面に暖かく清澄な雰囲気漂っているからである。このような諸相は、勿論さらさらっと描いて表現出来るものではない。或る時は中世のイコンに用いられた材木を使い、また或る時は和紙を使い、その上に、或いは水彩を、或いは油彩を、時には金箔を用いている。それにしても、江花さん特有の、一寸藤田嗣治を想わせるような、薄い肌色の、磁器のようなマチエールは、嗣治のニヒルさと全く異なって、深く暖かい、詩と音楽と宗教的な心を支えていて、私の心を優しく而も強く掴んで放さないのだ。

何時の間にか、私の家の壁面を埋めつつある江花さんの画は、私の心を柔かく暖かくなごませてくれるのである。

12.12.2004

日本語原文

内田 園生

元駐ヴァチカン大使
美術評論家連盟会員